

このページは印刷専用です。記事一覧に戻るには、必ず、[印刷ページOFF](#)をクリックしてください。

1	1998.06.01	[20世紀どんな時代だったのか] 番外編 スパイ王カナーリス (連載)	東京朝刊	朝特A	15頁	4904字	06段	写真・表・図
---	------------	-------------------------------------	------	-----	-----	-------	-----	--------

◆日独同盟を演出 反ソ信条、親中路線覆す 大島武官と防共協定推進
 中国をとるか日本をとるか——一九三〇年代、ナチスが政権を取ったドイツでは、親中派の軍部・産業界、親日派ナチス幹部、不介入を原則とする独外務省の間で、[極東](#)のパートナーをめぐる三者三様の綱引きが行われた。最終的に総統ヒトラーは、対中貿易による経済的利益より共産主義ソ連への牽制(けんせい)を重視し、軍事強国・日本を選ぶ。その結果、三六年、「日独防共協定」が結ばれ、両国が第二次大戦へと突っ走る端緒となったが、舞台裏には、「スパイ王」と呼ばれる独海軍将校の暗躍もあった。(20世紀企画班・木佐芳男)(文中敬称略)

◆国家に忠誠 反革命で活動
 神戸港の[川崎重工業](#)神戸造船工場。[阪神大震災](#)被害で中止されていた船の建造が、今秋、再開される。前身の川崎造船所時代の二四(大正十三)年、ここでUボート(独潜水艦)をモデルとする「伊号潜水艦」が建造されていた。これを水面下で支援する独海軍[軍令部](#)は、少佐ウィルヘルム・フランツ・カナーリス(当時三十七歳)に現地調査を命じた。

「七月二十二日、神戸に着く」「Uボート建造状況には問題はない」。独フライブルクの連邦軍事文書館に残されている訪日[秘密報告書](#)によると、カナーリスは[関東大震災](#)から間もない東京や横須賀も訪れ、海軍幹部、軍事技術者らに歓待され、「全般的に非常によい印象を得た」。そして、日本海軍を支援すれば英仏などを牽制しドイツの国益につながる、と強く進言した。

カナーリスは一八八七年、裕福な石炭鉄鋼産業の幹部技師の家に生まれた。「皇帝を敬愛する保守的な父親の影響が大きかったはずだ」とカナーリスの伝記を出したハインツ・ヘーネは語る。

カナーリスは十六歳の時、ギリシャへ旅行し、海軍提督コンスタンティン・カナーリスの記念碑を目にする。同姓であり、オス[マントル](#)コからの独立戦争の英雄だったことを知り、海軍将校へのあこがれを抱く。

海軍士官学校へ入ると「帝国を支えるのは我らであり、社会[民主主義](#)、共産主義との戦いは義務だ」と教えられた。六つの外国語を操り、国際交渉の達人だった。第一次大戦中、スペイン沖で作戦中のUボート支援のため諜報(ちょうほう)機関設立を指令され、本格的スパイとしての道を歩み始める。

一八年十一月のドイツ革命では、反革命側で活動した。革命家ローザ・ルクセンブルクらの殺害では、実行者の[オランダ](#)逃亡を助けた。

「訪日で、技術レベルの高さ、軍近代化のスピードを目の当たりにし、カナーリスは日本びいきになった」。独軍事史研究所のゲルハルト・クレプスは指摘する。

ナチスの台頭とともに「カリスマ的指導者をいただく国家建設」を夢見るようになったカナーリスは、三三年、ヒトラーが政権を握ると、「夢が現実になったような気がした」という。

やがて国防省防諜部長に就任し、共産党員弾圧などの経歴から、左翼系マスコミには「スパイ王」と皮肉られた。スタッフはのちに九百五十六人にも膨れ、親日で反共反ソの牙城(がじょう)となる。

三五年夏、[コムテルン](#)(ソ連の共産主義インターナショナル)が反[ファシズム](#)国家活動を活発化させると、カナーリスは、対抗上、イスパイなどと接触し「反ソ国際スパイ網」作りに走る。ここで再び日本に目を向けた。「日本文化は知らなかったが、訪日経験などから、その軍事技術、特に対ソ諜報能力に強くひかれた」(ヘーネ)。

カナーリスは、独海軍と日本に太いパイプを持つ武器商人フリートリヒ・ハックを通じ、ヒトラーの私的外交顧問で[ナチス党](#)幹部のリッベントロップ、駐独陸軍武官・大島浩(後に駐独大使)と知り合う。

大島は「[日露戦争](#)での日本の苦戦は、ドイツがロシアに不可侵を約束したからだ」と考えていた。陸軍一のドイツ通であり、対ソ戦に備え個人的に日独同盟を狙っていたから、当時はまだ日米関係を重視し対独接近に消極的だった日本外務省を無視し、独走する形となった。

反共反ソの信条、強引な手法でカナーリスと大島は共通していた。リッベントロップも、まだナチス支配下になかった外務省と敵対し、党内基盤も弱かった。ヒトラーから「まず手柄を立てろ」と言われ、独自の外交を展開しようとカナーリス=大島路線に乗った。

◆国防軍主流は日本を敵視
 だが、当時のドイツは、保守派や軍部を中心にむしろ反日感情が根強い現実があった。第一次大戦で日本が連合国側に加わり、アジア太平洋地域でのドイツの権益を奪ったことへの不快感からだ。外務省も[極東](#)不介入の立場をとり、日本の傀儡(かいらい)国家「[満州国](#)」を承認しなかった。

しかも、産業界は、中国への武器の密輸など、対中貿易に活路を見いだしていた。外貨の乏しい中国側には、戦略物資[タンクス](#)[テン](#)などと独製武器のパーター取引をできる利点があった。

独陸軍は中国・[蔣介石](#)政権に、二八年以来、軍事顧問団を送り続けた。「一時は約八十人にもものぼり、三二年の上海事変では、[蔣介石](#)軍が見違えるほど成長していた」(クレプス)という。また、「独国防軍の再建を進めた将軍ゼークトが、三三年に初訪中して以後、独国防軍では日本を仮想敵とする親中路線が主流となった」(成城大学教授・[田嶋信雄](#))。

独外務省も日独交渉をつぶすため陸軍親中派と歩調を合わせたため、カナーリスらは極秘で交渉を進めた。

◆ゾルゲ暴露で協定案宙に
 三五年十二月二十七日、ソ連タス通信が大スクープを放つ。「駐独日本陸軍武官(大島)と、リッベントロップ、独国防省代表(カナーリス)が日独軍事協定締結の準備を進めている。反[コムテルン](#)協定も結ばれるという」との内容だった。

元ドイツ共産党員でソ連赤軍のスパイとなったゾルゲが、スクープの陰で大きな役を演じた。ゾルゲは表向き、東京駐在の独紙特派員だった。かつては革命家ローザの同志であり、その諜報戦の標的の一人は、奇遇にもローザ殺害者の一味カナーリスだった。

タスの記事により、日独協定案は一度宙に浮く。しかし、カナーリス、大島らはあきらめなかった。

三六年七月にスペイン内戦が起きると、ソ連とコミンテルンの支持を受ける人民戦線政府に対し、将軍フランコが反乱、それを独伊が支援した。これがきっかけとなって「ヒトラーは、反コミンテルンの同盟国として、日本への期待を高めていった」（独フライブルク大学教授ベルント・マーティン）という。最大の仮想敵・ソ連との対決を念頭に、ヒトラーは英独伊同盟を狙ったが、不首尾に終わり、日本に目を向けた。

日本の方も、泥沼化する中国戦線でソ連の対中支援を封じるため、軍部、外務省ともソ連を牽制する必要からドイツへの接近に積極的になっていた。

その結果、日独防共協定は、三六年十一月、ベルリンで調印された。ドイツ側は、異例にも外相ではなくリッペントロップが駐英大使の肩書で署名した。表向きは単なる反共イデオロギー協定だったが、「日独いずれかとソ連の間で戦争が起きた場合、日本またはドイツは背後でソ連の負担を軽くするようなことをしない」との秘密協定が隠されていた。

調印翌日、協定締結を祝うヒトラー主催のパーティーに、国防軍からは一人カナーリスの姿があった。

親中派はその後も中国との関係を維持したが、「三七年に日中軍事衝突が起きると、ドイツ政府は最終的にアジア最強の日本を選んだ」（クレeps）。そしてヒトラーは三八年、満州国を承認、独中関係は断絶された。

◇ ◇ ◇

第二次大戦に入って、カナーリスは海軍提督にまで昇進したが、四四年のヒトラー暗殺未遂事件に関与した疑いで絞首刑となる数奇な運命をたどった。

◆「南京虐殺」記録したラーベ 独の対中貿易に貢献 避難民保護にも尽力

日本軍による南京での虐殺事件（一九三七年）を克明につづった独商人ジョン・ラーベの日記が、九六年末に出版され、世界的反響を呼んだ。そのラーベの中国での活動を通し、独中関係の裏表をうかがうことができる。

ハンブルク生まれのラーベは二十六歳で貿易会社の中国駐在員となり、やがて独ジューメンス社に移籍し駐在を続けた。

第一次大戦後、独産業界はベルサイユ条約での禁止にもかかわらず、ひそかに武器輸出を続けた。二五年に中国の各軍閥が輸入した武器総量の六割は独製だった、との説もある。

ミュンヘンのジューメンス本社付属博物館には、ラーベ自身がタイプ打ちした二百十五ページの手記「中国ジューメンス・コンツェルンでの二十五年」が残されている。学芸員は「わが社は武器を製造したことはないはずで、ラーベの記述にも武器関係はない」とする。

だが米ハーバード大学教授ウィリアム・カービィによると、同社もオランダの複数の会社を通じ、中国へ武器を売っていたという。成城大学教授・田嶋信雄は「二〇年代のラーベは武器貿易にかかわったはず」と見る。

孫文は二四年、ラーベの同僚で広東駐在のグスタフ・アーマンを通じ、ドイツから軍事顧問団を招こうとした。これは実現しなかったが、二八年、蒋介石が成功する。この年、ドイツは蒋介石の南京政府を正式承認し、翌年には独中貿易協定が結ばれる。

ラーベは三一年、ジューメンス社南京支社長となる。同社は、北京の発電、成都の放送などの各工事を受注、中国近代化事業に加わった。

南京の自分の土地にドイツ人学校を作ったラーベは、ヒトラー政権から支援を受けやすくするため、ナチス黨員になった。

独軍退役将校の武器商人ハンス・クラインが、三四年、独国防軍を後ろ盾として貿易会社「ハプロ」を設立、両国の軍事・経済関係が一段と強まる。

蒋介石政権は、三六年、重工業建設を柱とする「三か年計画」を打ち出す。主な資金はドイツからの巨額の借款だった。ジューメンス社は湖南省の製鉄プラント建設で、土木工事を請け負った。

「これら是对日戦争に備えた国防建設事業で、ラーベも力を入れただろう」（田嶋）。

一方で、ヒトラー政権はこの年、日独防共協定を結び、長年にわたる独中関係との矛盾が生まれる。翌年七月、日中戦争が起き、矛盾は決定的となる。膨大なラーベ日記のうち、出版された部分は三七年九月から始まり、自ら「戦争日記」と呼んでいる。同年十二月の日本軍の南京攻略に際し、駐在欧米人らは「国際安全区委員会」を結成、市中心部に非武装の「安全区」を作る努力をした。ラーベが委員会の責任者となる。行政はまひしており「私はまるで市長代行のようだ」（八日）。

日本の爆撃機に中国軍高射砲が応射する。「残念だがいつもはずれていた。いや幸運にもと言うべきか」（九日）。同盟国日本の空襲を受けるドイツ人の皮肉な心境だった。

日本軍がついに南京を占領する。ラーベは自宅に多数の避難民をかくまった。「日本軍部隊が次々とやって来たが、（ナチス紋章）鉤（かぎ）十字の腕章を眼前に突きつけると引き下がった。米国旗は権威がない」（十三日）。日独同盟関係がこんなところで力を発揮した。

この戦争日記に本来の業務関係の記述はほとんどなく、ラーベが直接戦争に巻き込まれた様子を物語っている。翌年二月、ラーベは本社からの帰国命令を受ける。ベルリンの講演で、人道的立場から南京での日本軍の暴虐ぶりを話し、ナチス秘密警察ゲシュタポに一時拘束された。以後、沈黙を通し、五〇年に病死する。

<独日中三国の関連年表>

- 1928年 蒋介石が独軍事顧問団を招へい
独は南京政府を正式承認
- 31年9月 満州事変
- 32年3月 満州国建国
- 33年1月 ヒトラー政権誕生
- 34年1月 独中貿易会社「ハプロ」設立
- 36年4月 独中条約
- 6月 中国「3か年計画」策定
- 11月 日独防共協定調印
- 37年7月 日中戦争起きる
- 11月 日独伊三国防共協定
- 12月 南京陥落、虐殺事件
- 38年2月 リッペントロップ外相就任
ヒトラーが満州国承認を宣言
- 39年9月 第二次世界大戦勃発（ぼっぱつ）
- 40年9月 日独伊三国軍事同盟

写真=リップントロップ（右端）を訪問した大島浩（ウルシュタイン社提供）

写真=ドイツ海軍将校カナーリス（ウルシュタイン社提供）

写真=日中戦争時の南京で、ヘルメットをかぶって執務するラーベ（ドイツ出版社提供）

図=カナーリスの訪日[秘密報告書](#)